

羅生門	名前	年	組	番
-----	----	---	---	---

(1)羅生門の修理などは、もとより誰も捨ててカエリみる者がなかった。(五六・1)

顧				
---	--	--	--	--

(2)ヌスビトが棲む。(五六・2)

盗人				
----	--	--	--	--

(3)高いシビの周りを鳴きながら、飛び回っている。(五六・7)

鴟尾				
----	--	--	--	--

(4)それがゴマをまいたようにはつきり見えた。(五六・8)

胡麻				
----	--	--	--	--

(5)ところどころ、クズれかかった。(五六・11)

崩				
---	--	--	--	--

(6)そのニゴった、黄色い光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、(六〇・1)

濁				
---	--	--	--	--

(7)火の光の及ぶ範囲が、思ったよりセマいので、(六〇・8)

狭

(8)老婆は、松の木切れを、床板の間にサして、(六一・11)

挿

(9)オオマタに老婆の前へ歩み寄った。(六一・13)

大股

(10)慌てふためいて逃げようとする行く手をふさいで、こうノノシった。(六三・2)

罵

(11)ちようど、トリの脚のような、骨と皮ばかりの腕である。(六三・6)

鶏

(12)へビを四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、(六五・5)

蛇

(13)この老婆をトラえた時の勇氣とは、(六六・4)

捕

(14) 下人はアザケるような声で念を押した。(六六・10)

嘲

(15) おれが引剥ぎをしようとウラむまいな。(六六・13)

恨

(16) 足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へケタオした。(六六・15)

蹴倒

(17) 外には、ただ、コクトウトウたる夜があるばかりである。(六七・8)

黒洞々